

ガブリエル・タルドにおける二つの資本概念の検討

——発明資本と貨幣資本——

中倉 智徳（日本学術振興会・大阪府立大学）

1. はじめに

本報告では、ガブリエル・タルド (Gabriel Tarde 1843-1904) について、自らの社会学理論に基づいた経済学批判および経済理論の構築を目指した人物としてその社会・経済思想について概観する。そして、彼の資本概念について、知識や技術の発明を本質的な資本として資本概念に導入していること、それ以外を副次的な資本としてみていたことから、これらの発明資本と、副次的資本としての貨幣資本という二つの資本の概念について、その特徴を検討していく。

タルドは、社会学史においてはエミール・デュルケムの論敵であり、「社会は模倣である」とする模倣説を唱えたフランスの社会学者として知られてきた。経済学史においては、シュンペーターの学説史研究のなかで、経済学を心理学のなかに組み込もうとした人物の代表という否定的な言及によって知られてきた (Schumpeter 1908=1983)。また、タルドの発明概念を、シュンペーターのイノベーション概念の先駆として評価しようという先行研究が複数ある (Taymans 1950; Michaelides & Theologou 2010; Kobayashi 2012)。ただしその研究は、シュンペーターのイノベーション概念の起源探しという関心のためからか、先行研究ではタルドの発明概念に与えられていた含意の多くを捨象している。とくに発明が本質的な資本としてされていたことは、指摘されつつも十分に検討されてこなかった。しかし、このタルドの資本としての発明概念は、シュンペーターとの比較においても、検討される必要があるように思われる。

ところで、前述のシュンペーターの評価は、「心理学」という語で想定されている内容を除けば妥当なものである。タルドは経済学によってその他の社会科学の領域が「侵食」されていることに危機感をもっており、それに対抗する必要性を感じていた。1888年に *Revue d'économie politique* 誌に掲載された「価値の二つの意味」という論文のなかで、「政治経済学が日に日にその他のあらゆる社会科学を侵食して拡大している」ことに危惧を示し、のちにも、「結局のところ、彼ら正統派の経済学者たちが発見したと信じた経済法則こそが社会の根本的な法則であると信じ込んだ人全員の眼には、政治経済学は社会科学そのものとなるであろう」(Tarde 1902b : 284) と述べているなど、経済学によって社会科学がとりこまれようとしているとみなしていた。タルドによる経済学の評価は、他の社会科学、とくに社会学に対して大きく前進していることは認めつつも、主観的なものの考察が欠落している点において不十分であり、その欠落を埋めぬままに経済学が社会科学へと置き換わることに對して批判的であった。

このような批判からみてとれるように、タルドの社会・経済理論の前提となっているのは、「心理学」である。ただしそれは、個人の動機や感情、錯誤などを検討するものではなかった。むしろ、他者とコミュニケーションしあう個人間での、精神的な相互作用を対象とするものであった。例えば、会話によって、書物を通じて、人と人の間には、精神的な影響関係——それが一致する場合に、タルドは模倣と呼ぶ——がある。このようなコミュニケーションを対象とするのが、彼のいう「間-心理学 *inter-psychologie*」であった。タルドによれば、「社会とは、間-精神的作用の織物」、「どんな仕方であれ一方から他方へと作用する精神的諸状態の織物」なのであり、「一つ一つの間-精神的作用は……相互的あるいは一方的に、他方を精神的に変えるような関係のなかにある」のである(PE I: 1)。タルドは、このコミュニケーションによる個人の精神的な変化を、その欲望、意志、知識、信念などの変容としてとらえ、間-心理学によって分析を行なった。そして、この間-心理学を基礎としてみずからの社会学を構築し、その一つの分野に経済学をおいたのである。

2. タルドの経済心理学

タルドは、その最後の著作『経済心理学』(1902)のなかで、「富の理論がこれまでその上に築き上げられ、積み上げられてきたプランは、完全な改変を受ける必要がある」(PE P-3-p: 97)と述べている。すでに指摘した間-心理学に基づいた経済理論の構築という立場から経済学の公準の多くを読み替えていく。その経済理論その全体像については、別稿(中倉2011)を参照いただきたいが、タルドは、経済学の前提に対して考察を加えていく。一例を挙げれば、タルドは経済学が想定している任意の幸福を追求する個人「ホモ・エコノミクス」(PE I: 115)を批判する。その幸福概念は、人びとの嗜好の多様性を包含するために「欲望されたもの」といった程度の意味しかなく、幸福の追求とは、「欲望されたもの」の実現を欲するという、まったく無内容なトートロジーでしかなくなっていると批判し(PE I: 154-155)、むしろその欲望がどのような「出会い」やコミュニケーションを通じて伝播してきたのかといった来歴を研究しなければならないと論じる。富の生産においても、「富の再生産は、消費の欲望の心理的再生産を前提としているのであり、それなしには、物的な商品はまったく富を再生産しえないだろう」(PE I: 144)と考え、再生産の要素として、土地・労働・資本という三つをおくのをやめ、そこに欲求をくわえて、欲求・労働・貨幣の循環を見なければならないと論じる。セー法則によって、「経済学者は、それと知ることなく、隠れた欲望の伝播を常に公準としている」(PE I: 207)と指摘し、それ自体が問われる必要があるタルドは主張する。例えば、ワインを飲みたいといった欲求それ自体が、誰かが発明したものが模倣によって普及したものであるという間心理学的な観点にたち、この欲求が普及し再生産されているからこそ、ワインは富として価値をもち、再生産されるとタルドは考える。このように、間-心理学の立場から、経済学のさまざまな前提を問いなおしていく。

3. 発明資本、協働、余暇

資本概念においても、間 - 心理学の立場から問いなおしと再構築を行なっている。タルドはそれまでの資本概念の定義が多様であるが、「資本は再生産に役立つ」という点においてのみ共通していたと分析する。しかし、この共通点だけでは曖昧であり、例えば機械、再生産のための貯蓄など、さまざまなものを資本概念のなかに含意したままであるために、そのなかでも再生産を行なうために欠かすことのできない本質的なものと、その本質的なものにたいする補助的なものがあるとする区分を導入する。

私の意見では、資本概念のなかには区別されるべき二つのものがある。1. 必須の、本質的な資本である。すなわちそれは、支配的な発明、あらゆる現勢的な富の第一の源泉の総体である。2. 多かれ少なかれ効用をもった補助的な資本である。すなわちそれは、これらの発明から生じた生産物の一部分であり、新たなサービスを手段として、別の生産物を創り出すために役立つ。(PE I: 336)

暗黙の前提とされてきた「職業的機密、耕作方法、新たな生産物の製造のための原材料の採取、道具や機械の製造のために用いられる手法の存在と知識」(PE I: 333)が、再生産のために必須の、本質的なものであるとして、資本のなかに知識や発明を導入する。このような再生産のために必須の知識や発明を、「本質資本」、「知的資本」、「人間資本」などと呼んでいる。例えば、機関車の生産のために厳密に必須のものとして、タルドは、「機関車の部品についての詳細な知識」、「機関車をつくるための原材料を抽出する仕方」、「製造するやり方についての知識」といった「大小の発明」であるとしている。これらの発明なしには、材料や労働力がいくら膨大にあっても、機関車を生産することは不可能であるからであるという点に注目した規定であるといえるだろう。

この発明資本の増大と保存は、まさに間 - 心理学の対象である、コミュニケーションによってなされる。つまり、発明は、模倣によって伝播することで蓄積・保存される。そして、発明とは「結局のところ、ある脳の中かで、互いに実りをもたらすような、模倣の交差」(PE II: 42)であり、例えば車輪の発明と原動機の発明、ハンドルの発明といった、過去に別々に生み出されたものが組み合わさって自動車を構成しているように、それまで模倣されていたものを素材として用いている。そしてそれらの模倣された諸々の発明が、誰かの脳内において別様に「幸福な出会い」を引き起こすことによって、発明が生じる。このような、発明されたものをやり取りしあう脳と脳の協力、「脳の協働」(Lazzarato 2004=2008)によって、発明資本は増大していく。この脳の協働は、労働における協働とは異なっており、むしろ、「余暇」と「ゆとり」があることが必要であるとされ、発明をもたらす余暇の分配問題を問う必要性が論じられていく。

産業革命以来、技術が産業の発展を推し進める重要な要素であることは認識されてい

た。しかし、タルドのように発明を資本であるとし、その増大を目指すために、余暇の分配等を論じていく構想は数少ないだろう。

4. 補助的資本、貨幣資本、信用

上記のような発明資本に対し、補助的資本は、道具、機械、資金、生産物などを指すものであり、労働の結果、貯蓄の結果であるとされる。ただし、「労働者による不払いの剰余労働が、資本を誕生させ増大させるのを許したというのは真実ではない」(PE I: 350) とタルドはいい、むしろその増大の起源を、貸借による信用に基づくものであるとみなしている。「資本の真実の源泉とは、経済的進化の最も古い起源から、信心 *acte de foi* と信頼 *confiance*、つまり信用の最初の萌芽であり、そしてこれは明らかに、文明化された社会の生産的生活の魂である」(PE I: 375-376)とまで述べている。

この補助的資本は、貨幣資本の形態が可能になったことで、急速に増大したとタルドはいう。無限に蓄積可能であり、具体的な富とは切り離された、「信用」に基づいた「記号」という貨幣の特徴が、具体的な富の循環の速度を超えて、継続的な信用に基づく取引を可能にする。「この資本は、常に、区別される投資 *placement*、様々な貸借 *prêt* によって構成されており、植物的、動物的、人間的労働の循環による富の周期的な再生産と同じくらい、はっきりした、不平等な、無限に多様な時代において与えられた決定的な推進力なのである」(PE II: 363) と論じている。しかし同時に、この貸借は、生産に必要な道具の独占的所有と貸借といった形態——生産手段と労働力の分離といわれるような——をとる場合、それは生産の活性化には役立つものの、道具の所有者と借り手の一方的な関係性を構築することも指摘している(PE II: 366-367)。

5. 二つの資本——発明と信用の関係

上記の二つは、最初に再生産に関わる本質的なものと補助的なものという区分によって、同じ資本概念のなかに入れられた。しかし、その内容は対象的といってもよいほどに異なっているように思われる。しかも、本質資本と呼ばれるもののほうが、新たに挿入されているように思われる。これらの両者の本質 - 補助という関係性は、具体的にはどのようなものなのであろうか。このように問うことは、イノベーションと信用創造をめぐる議論を想定するとき、検討されるべきだろう。

本質資本—副次的資本という最初から前提とされている前者による後者の基礎づけ関係は、その増大の局面よりも、破壊の局面において見られる。気球が非常に実践的に成功し、鉄道よりも経済性、利便性などあらゆる点において優れた輸送手段として現れた場合をタルドは仮定する。このときまで、輸送したいという欲求や旅行したいという欲求に答えていたのは鉄道であったが、仮説のような気球によって鉄道が完全に代替された場合、鉄道

は、もはや再生産されなくなるだろう。このとき、「駅、機関車、線路といったあらゆる鉄道に関する物質は、その効用を失い、死んだ資本 **capital mort** となるだろう」(PE I: 338)。つまり、鉄道という発明資本が必要とされなくなることによって破壊されるとき、そのために発明に付随していた駅や機関車や線路といった物質資本も、併せて不要になってしまい再生産されなくなるという。このような形で、物質資本の損耗率などにかかわらず、不要になってしまうようになる事態によって、タルドは発明資本と物質資本との関係が本質的—副次的であることを示そうとしている。

ただし、発明された知識が生産のために必要であると認めたとしても、そのような発明を持っているにもかかわらず実現し具体化するための手段がない場合、補助的資本といわれる物質資本の欠如は、やはり生産のための必須のもの欠如であるのではないか。例えば生産のための知識はあるが生産手段も貨幣資本ももたない労働者たちについては、タルドはどのように考えているのだろうか。一つには、それらの労働者がアソシアシオンを形成することで、ある発明の実現のための信用を獲得することによって、解決が可能だとする見解である。「われわれの時代においては、成功の幸運とともに企業を打ち立てるためには、資本家である必要はない。すなわち、アソシアシオンをつくった 10 人のプロレタリアートは、それぞれがであわずにバラバラであれば誰も持っていなかったであろう信用を手に入れる」(PE I: 352-353)。このような発明と信用の関係は、のちにシュンペーターによって論じられる、新結合と信用創造をめぐる問題に接しており、検討する必要があるだろう。

主要参考文献

- 大黒弘慈, 2012a, 「タルドとバジヨット——模倣と経済学」『龍谷大学経済学会』51(4): 127-139.
———, 2012b, 「模倣・同感・信用——スミス・タルド・バジヨット」『思想』1055: 6-40.
- Kobayashi, Daisuke, 2012, “Sociology of Invention and Schumpeter’s Schema of Socio-economics: Underlying Evolutionally Explanation”.
(<http://www.aomevents.com/media/files/ISS%202012/ISS%20SEESSION%202/Kobayashi.pdf> :2012年8月29日確認)
- 小泉義之, 2006, 「脳の協同——ガブリエル・タルド『経済心理学』を導入する」『未来心理』8: 40-49.
- Latour, Bruno & Vincent-Antonin Lépinay, 2008, *L’Économie, science des intérêts passionnés: Introduction à l’anthropologie économique de Gabriel Tarde*, Paris: La Découverte.
- Lazzarato, Maurizio, 2002, *Puissance de l’invention: La psychologie économique de Gabriel Tarde contre la économie politique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond.
———, 2004, *La Politica dell’evento*, Rebbettino Editore. (=2008, 村澤真保呂・中倉智徳訳『出来事のポリティクス——知・政治と新たな協働』洛北出版.)
- Michaelides, Panayotis G. & Kostas Theologou, 2010, “Tarde’s influence on Schumpeter: Technology and social evolution,” *International Journal of Social Economics* 37(5): 361-373.
- 中倉智徳, 2011, 『ガブリエル・タルド——贈与とアソシアシオンの体制へ』洛北出版.
- Schumpeter, Joseph A., 1908, *Das Wasen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Taymans, Adrien, 1950, “Tarde and Schumpeter: A Similar Vision,” *Quarterly Journal of Economics* 64(4): 611-622.
- Tarde, Gabriel, 1881, “La psychologie en économie politique,” *Revue philosophique de la France et de l’étranger* 12: 232-250.
———, 1884a, “Darwinisme naturel et darwinisme social,” *Revue philosophique de la France et de l’étranger* 17: 607-637.
———, 1888, “Les deux sens de la valeur,” *Revue d’économie politique* 2: 526-540; 561-576.
———, 1902a, *Psychologie économique*, I ; II, Paris: Félix Alcan. = [PE I ; PE II]